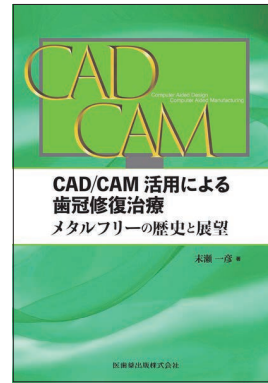


歯科医療の大転換期における適正な  
材料選択・使用を末瀬一彦先生が明説!

## 『CAD/CAM 活用による 歯冠修復治療 ——メタルフリーの歴史と展望』 を読んで

昭和大学副学長  
宮崎 隆



末瀬一彦 著  
定価：8,800 円  
(本体 8,000 円＋税 10%)  
B5 判カラー / 136 頁  
医歯薬出版株式会社 刊

超高齢社会に突入したわが国では、国民の健康長寿が求められている。その中で歯科医療関係者は、歯科医療を通じて国民の健康寿命の延伸に貢献すべく、日夜努力を重ねている。

歯科医療、とりわけ補綴治療では、従来患者の個別の症例に対して最適治療を提供してきた歴史があり、その中で高度専門職としての歯科技工士の役割が大きかった。しかし、少子化の社会構造の中で、歯科技工士の担い手不足が問題になっている。また、わが国では国民皆健康保険制度に歯科医療が組み込まれ、わが国独自の金銀パラジウム合金を利用した歯冠修復・補綴治療が保険治療を支えてきた。しかし、パラジウムや金の価格高騰により、保険制度の維持のために脱金銀パラジウム合金が課題になっている。

一方、長引くコロナ禍の中で、社会生活が大きく変貌した。わが国を含めて、世界中で DX 化が進められている。医療や歯科医療もこれと無縁ではない。歯科医療ではすでに、多くの検査機器や治療機器、歯科技工機器がデジタル制御されており、歯科医療の特徴である補綴装置製作にかかわる歯科技工工程にデジタル成形である CAD/CAM が導入されてきた。

新しい材料や機器の開発により、結晶化ガラスやジルコニアを利用したオールセラミック修復がグローバルスタンダードになり、口腔内スキャナーが歯科医療のルーティンワークを変えようとしている。今まさに、歯科医療は大きな歴史の転換期に突入していると言える。



このような状況下で、今日までわが国のデジタル歯科を牽引してきた末瀬一彦先生が、ライフワークの集大成として、『CAD/CAM 活用による歯冠修復治療——メタルフリーの歴史と展望』を上梓した。

末瀬先生は大学で歯科補綴学の研究、診療、ならびに学生教育に長年取り組んできただけでなく、全国歯科技工士教育協議会の会長として、歯科技工士の教育に取り組んできた。学会活動では、ご専門の日本補綴歯科学会のみならず、日本歯科理工学会や日本歯科審美学会ほか多くの学会

の役員をされ、2010 年には日本デジタル歯科学会（発足当時は日本歯科 CAD/CAM 学会）を創設して、今日に至るまで会長・理事長として学会を発展させてきた。



金銀パラジウム合金の代替として、わが国独自の歯冠修復として、CAD/CAM で成形されたコンポジットレジン冠が 2014 年に CAD/CAM 冠として保険収載され、小白歯から大白歯、さらに前歯部へと全顎的に適応が拡大してきた。CAD/CAM 冠という名称がつけられたため、歯科界にデジタル成形技術としての CAD/CAM という用語が定着したが、CAD/CAM 冠の素材であるコンポジットレジンの材料学的位置づけについては十分に理解されていない。本書では材料の理工学的特性をもとに、臨床術式の注意点が詳細に解説されている。そして、さらなる適応拡大への期待が述べられている。

一方、自費診療としてメタルボンドに代わるジルコニア修復は、新しいジルコニア素材が続々と開発され、急速に臨床応用が進められている。メタルフリー修復に関しては、臨床成書が多数出版されているが、本書では強度や透光性などの材料特性をもとに、公平な立場で新しいジルコニアの選択ができるように解説されている。



歯科技工の将来にはデジタル化が不可欠であるが、デジタル化の課題について、厚生労働省の検討会の議論を踏まえて、今後の展望が述べられている。歯科技工士教育については、わが国の高い技能を継承しつつ、アナログとデジタルの融合により新しい資質を兼ね備えた歯科技工士育成に向けての期待が語られている。

そして終章においては、これからの歯科医療のゴールを「9028」実現に設定し、歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士が一つのチームとして協働することが、国民の健康増進に貢献すると提言している。私もまったく同感である。

多くの歯科医療関係者に本書を読んでいただき、新しい歯科界からの国民運動として、ぜひとも 9028 運動を推進していきたい。